

手書き資料の〈考古学〉：西欧中世史料学とテキスト学

岡崎，敦
九州大学大学院人文科学研究院

<https://hdl.handle.net/2324/7168370>

出版情報：人間文化研究資料の多元的複眼的比較研究：人間文化研究総合推進事業活動提案報告書.
2009, pp.18-25, 2010-02. 国文学研究資料館

バージョン：

権利関係：

はじめに

西欧前近代史料学としての「手書き資料 manuscript, Handschrift, manuscrit」研究とは、古代・中世テキストの批判校訂、およびモノとしての前近代書物研究である。後者は、従来主として古書体学 paleography、古書冊学 codicology、あるいは部分的には美術史研究が、前者は文献学 philology がその本領としてきた。これらの研究領域は、従来、「学問以前」の補助学問と揶揄されながらも、実は、西欧近代の人文系学問のなかでももつとも古く、洗練された伝統を誇っている。ここでは、これらの領域が、近年とみに注目されている所以を、テキスト学の刷新との関係で論じてみたい。具体的には、テキスト学をめぐる最近の動向を念頭に、西欧中世史料学の領域で積み重ねられてきた知見と方法を紹介する。西欧中世におけるテキストの存在と伝承、解釈学的テキスト論の流行と問題関心の変容が、「手書き資料の〈考古学〉」としての古書冊学の展開と不可分の関係にあることを示すことが、さしあたりの目標である。

本論に入る前に、西欧中世史料学研究について、いくつか指摘しておきたいことがある。第一に、中世史料学は、西欧では、いわゆる「実証主義」のもとに、近代学問の成立と不可分の歩みを遂げてきた。一般的概論講義を本領とする大学においては、史料学は「講座」としての承認を必ずしも得ているとは言い難いが、大学以外の研究、教育ポストは確保され、関係の諸学会を維持するという意味で、アカデミズムのなかにしっかりと組み込まれているといえる。とりわけ、一般大衆向けのジャーナリズム、講壇との対立関係は根強く、史料に基づかない文明史観をアマチュア趣味として蔑視する特殊な研究者集団を構成しているとすら見受けられる。第二に、西欧中世研究自体の意義である。西欧にとっての中世の認識、再評価は、19世紀における保守的な西欧文明観の形成とともにその基礎に位置づけられたことと直接関連している。そこでは、啓蒙主義的世界観を代表する世俗、啓蒙、ブルジョワに対して、キリスト教、古典教養、貴族主義が対置される。ルネサンスや資本主義、さらには国民国家の土台となる民主主義とも必ずしも親和的ではなく、むしろエリート主義的なキリスト教世界への憧憬を心情的に有している。にもかかわらず、西欧「近代」学問の方法論が徹底して鍛えられたのは、むしろ実証主義の権化としての史料学体系であり、とりわけ中世は、史料状況と学問の方法論の精緻化とがあやういバランスを保つ、研究の最良の実験場とみなされた。

1. テキストの伝承と手書き資料

「手書き資料」を「写本」と呼ぶ習慣が日本では根強いが、日本語で「写本」と称されるのは、「写されたテキストが本のかたちをしたもの」のみを指し、これは、西洋中世における、記述資料の代表的伝来様式を意味する。この定義が一定の意義を有するのは、テキストあるいは資料の存在のあり方というよりは、研究状況との関連であろう。すなわち、古代・中世テキストの批判校訂、およびモノとしての前近代書物研究である。他方、文書=アーカイヴズ資料の多くも同じく「手書き資料」と表現されるが、当初作成された状態(オリジナル)で伝来するものも多い。この二つの資料類型の区別は、19世紀以降の資

料の保存場所としての図書館と文書館の区別にも対応するとともに、史料学研究のもっとも基本的な分類を構成している。この両者は、研究の歴史においては長らく、しばしばまったく別物とみなされてきたが、近年の情報科学の発展や資料認識の深まりの結果、取り扱いの方法論としても、歴史的な存在や伝来の性格としても、現在接近しつつある。

ところで、西洋の古代・中世文献の伝来には、歴史的な特徴がある。まず第一に、ほとんどすべては、著者の自筆ではなく、写しの形態で伝来している。初期においては、主としてキリスト教聖職者・修道士が、聖書をはじめとするキリスト教教典、文献のみならず、異教の著作を大量に筆写して後世に伝えた。この際採用された筆写の選択基準が、結果的にテキスト伝承の運命を決定し、事実、テキストが遺失し、存在のみが伝わる作品の数は少ない。そのような情報自体伝来しないものが相当数存在したであろうことを考えれば、現在伝来するテキストが、かつて作成されたもの全体との関係ではどのような位置にあるのか自体、検討に値するのである。他方、13世紀以降は、都市の出版アトリエが写本製作の場として登場し、俗人貴族、都市民、さらには学識者などの、より広い受容層の形成とともに、著作数や、それにつれて写本数が増加し、その類型も多様化するに至った。しかしながら、量の増加が伝承の確保を意味するとは限らず、かえって大量のテキストが遺棄されたことも想定可能である。

他方、西洋世界において、手書き資料がテキストの本質的な伝来形態なのは、手で書くこと以外に文字を定着させることが一般的ではなかったためである。少なくとも膨大な量の書き物が生産され、多くの需要が生じたとみなしうる13世紀以降、なぜ活版印刷の発明に至るまで、他の技術が採用されなかったのかを問うこともできるはずだが、これにも確かな答えは用意されていない。

しかしながら、もっとも重要なのは、テキストの流布が手書きによって確保される以上、その伝承には安定性が欠けていたことである。テキストの「刊行」という概念自体は、何人かの著作者に存在していたとはいえ、前近代の「写し」とは、編集や解釈が常に滑り込む、新たな「版」の創造であったことは特別な注意を要する。筆写生は、モデルとなるテキストに問題があると判断すれば、一般に書き換えることをためらわなかったし、それが常によりテキストを提供することであると信じていたと考えられる。少なくとも、前近代に流通し、それぞれの時代の読者の目の前に開かれていたテキストは、今日の批判的校訂版のそれとは一般に異なるものと考えねばならない。また、巨大な図書館や蔵書構築が物理的に不可能な状況にあって、教師や学生は、一生を通じて大量の文献に接しながら、それらの抜き書きメモを作成し、テキスト執筆にあたっては、それらの私的メモによっても推測されている。前近代におけるテキスト作成とは常に先行するテキストへの注釈であることを想起すれば、テキストの作成も受容も「断片化」されていたことの意味は大きい。

さらに重要なのは、前近代における「作品」概念の問題である。あるテキストに唯一真正な「作品」の存在を想定するのは近代の常識であって、以前には、その前提が欠けていた。たとえば、個々の作品には「書名」がなく、テキストはしばしば著者と、テキストの最初の（数）語で示された。また、抜粋や翻案、断片等からなる詞華集が非常に好まれた点も重要である。大学で利用された教科書は、原テキストを恣意的に切り刻んだ断片の集成であり、原典はほとんど読まれなかったとすら言われている。逆に、一つの作品は、し

ばしば別人によって、継続されたり、続編が書かれたりした。最後に、現在伝来する手書き本の多くは、作成時期が異なる諸テキスト部分が、後世に合冊・装丁された結果として伝来しているが（集合写本）、作成された時代においても、一つの作品が一つの書物を構成することは稀であったと考えられる。問題なのは、その作品編成は、現在の私たちにはしばしば思いがけない組み合わせに見えることである。

最後に、口頭伝承の文字化という問題がある。12世紀以降、本来書かれるはずがない話し言葉テキストが、勉強せねば修得出来ないアルファベットによって書かれるという奇妙な現象が本格化した。これは、同時に、聖職者をはじめとする一部の特権エリートのみが操ることができたラテン語の特権的な地位に対する、本来は習得のためには勉強する必要がない話し言葉の挑戦が開始されたことを意味する。重要なのは、慣習法や口頭パフォーマンス行為は、安定したテキスト構築とは両立せず、ここでもまた複数の手書き資料「版」の交錯現象が見られることである。ここでは、そのような文字化の担い手と、テキストの機能についての諸問題が提起される。いずれにせよ、中世初期には文字の担い手の圧倒的多数は聖職者であり、彼らは古典古代から継承した修辞や資料類型についての観念を（変容させながらも）維持していたのに対して、話し言葉が文字の世界に浮上することは、そのような言語（ラテン語）および教養（文章の規則）自体を変容させずにはおかなかったのである。

2. 解釈学的テキスト論の流行と問題関心の変容

古典的なテキストの批判研究において目標とされてきたのは、「批判テキスト」の構築と究極のオリジナル復元であった。このため、「良い」写本の選別が求められ、写本相互の関係はラッハマン原則に基づく系統樹として描かれた。伝来過程の基礎研究が推奨されるとともに、伝来自体の類型論研究が深められたのも、究極の「良い」テキスト同定こそが史料学の最終目標であるとみなされたからである。この発想は、出版テキストから自筆原稿へとさかのぼることで、流布するテキストの「誤り」をただすという意味で、近代著作の刊本と自筆原稿という関係を転倒させたものであるが、同じく単線的で「究極のテキスト」への信仰に負っていたといえる。しかしながら、現在では、前近代テキストについての認識が深まった結果、従来のテキスト校訂の前提自体が揺らいでいる。従来から存在した批判に加え（伝来する材料からの判断でしかない、テキスト校訂は新たな「写本」の創造など）、根本的な方法論上の諸問題が遡上にのせられた。たとえば、前近代には「決定版」テキストなるものの存在自体が自明でなく、さらに、断片的なテキスト集成著作がその典型であるように、単線的な伝承は例外的と見なされる。口頭伝承テキストに至れば、これは本来的に流動的・動態的性格を有していると考えねばならない。ここからは、究極的な唯一のテキスト追求から、個々の「手書き資料」個々の歴史的価値への関心の移動が生まれた。

ところで、20世紀後半における読書行為論の隆盛は、テキスト学にも大きな影響を及ぼした。受容理論はすでに、テキスト作成における「期待の地平」を視野に入れていたが、その後はさらに、テキストの能動的利用やそれを可能とする諸条件の研究が相次いだ。同一テキストが多様な読みの実践にさらされる様態に関心が集中し、その前提をなす解釈共同体の生成と機能が議論的となった。また、従来はもっぱら文字の読み書き能力として

の「客観的判定基準」として研究されることが多かったリテラシーについても、メッセージの一方通行的な透明な伝達という前提が疑われるに至り、むしろ、意味が発生し共有されるコミュニケーション空間のあり方に関心が移っている。リテラシー研究において、60年代まで華々しい活躍を見せていたのは、ハヴロック、オング、グディ等のいわゆる「強い理論」（あるいは「分水嶺理論」）派であったが、その後は、個別の解釈のための準拠として理論をとらえる「弱い理論」派の立場から、個別研究が多く現れるようになった。そこでは、口頭所作パフォーマンスと文字の共存のあり方が焦点となり、なかでも中世は、両者の絡まりがもっとも興味深い現象を示すものとして特別な研究対象とみなされるにいたった。また、規範ではなく、個々の実践や実務のレベルから文字利用を考察することが主流となったことから、一般論の回避とある種の現場主義が標榜されることとなる。

以上のように、「純粋なテキストの透明な伝達」という像自体が脱神話化されたことから、テキスト行為を普遍的な究極の姿のもとでとらえることを拒否して、個々の場における諸関係の束と考える新たなテキスト学が提唱されることとなった。ところで、テキストとは、そもそも「織りなされたもの」の意であるが、あるテキストは、それをとりまく諸関係の網の目のなかで、歴史的にある特有な姿をとるものと考えることができ、間テキスト、前テキスト、パラテキスト、メタテキストなど、テキスト相互の関係に焦点をあてる重要性が強調された。この際、西欧前近代テキストは、先行する諸テキストの注釈を本質とする一方、少なくとも伝来するテキスト内部には首尾一貫した強固な言説が存在しないという意味で、このようなテキスト理論にむしろ親和的な研究対象とみなすこともできる。

最後に、この動きが、一部のテキスト研究にみられた「テキストへの閉じこもり」への批判として表れていることが重要である。すなわち、テキストの読みは、限られた世界の内側で妄想をたくましくすることではなく、歴史的な限定された具体的な諸条件のもとでとりえた諸関係の理解とみなされるが、西欧中世テキストは、まさにそのような経験が積み重なった堆積物として、私たちの前に現れているからである。

3. 古書冊学とテキスト学

以上のような研究状況の刷新のもと、古典的な史料学があらたな脚光を浴びつつある。なかでも書冊型の手書き本研究としての古書冊学は、20世紀半ばに新たに体系化された比較的新しい学問であり、最近の読書行為論やテキスト学とも協調関係にある。古書冊学がしばしば「書物の考古学」と呼ばれるのは、この学問が、現在伝来するモノとしての書物に残る作成や利用の痕跡を「群」や「層」として弁別し、それぞれの特徴を記述、批判することを本領とするからである。

すでに述べたように、現在伝来する前近代の手書き本は、歴史のある段階で由来の異なる複数のユニットが合冊、装丁されたものであることが多い。古書冊学は、まず、それぞれの作成の単位を弁別せねばならない。この際、まず重要なのは、支持体の材質である、西欧前近代においては、パピルス、獣皮紙、紙の三種類の素材が使用されたが、それぞれの性格や製作、利用の基礎的研究が積み重ねられており、当該の支持体がどのような歴史的な位置を占めるかが検討される。ついで、ある書物がどのように編成されているかが問題となる。書冊型の書物は、物理的には折り丁 *quire*, *cahier* と呼ばれる用紙を何枚か束ね

た単位の集合体から構成されており、これらの折り丁構成を復元することが重要な課題となる。折り丁は、書物作成の基礎単位ともなったことから、しばしば製作段階の様子を復元するための貴重な情報を提供する。さらに、折り丁編成としばしば関係するレイアウト構成がある。文字をきちんと配置するためには罫線が引かれていなければならないが、罫線の配置やその引き方のテクニック自体が歴史情報である。

書物には一般に文字が配置されているが、文字のかたち、すなわち書体もまた、貴重な情報を与えてくれる。ラテン語古書体学は、長らくラテン・アルファベットの類型や変遷、さらには西欧中世を通じて、種々の文字のかたちの生成、伝播の様子について知見を積み重ねてきたが、すでに今世紀初めには、中世初期のすべての伝来手書き本の性格を、書体の性格吟味のみで同定可能と認識していたほどである。ここでは、狭義の文字だけではなく、省略記号、句読点、パラグラフ、特殊記号、表記（継続書記と分かち書き）、ページ空間、行配置など、文字を書く行為全般が問題となる。

手書き本は、文字が書かれた次の段階で、さまざまな装飾を施されることがありえた。装飾には、挿絵から装飾頭文字まで多くのヴァリエーションが存在し、古書冊学、古書体学、美術史学の境界に位置する研究対象であろう。装丁も同様である。

他方、手書き本の内容には、本文以外に、テキストの生成や利用その他に関わる重要な情報が付加されることがある。序文、結び、献辞などの付随テキスト、目次、索引などの補助テキスト、コロフォンを初めとする筆写生による言述、さらには、作品の始まりと終わりを指示するための表題、装飾飾り文字、欄外の指示など、その類型はさまざまである。

手書き本には、製作以後の段階でのさまざまな活動の痕跡が残っている。まず、所有者を示す記号、テキストがある。さらに、特定蔵書への統合についての情報、たとえば、購入、寄贈、貸借、売却、交換などの情報が書き込まれていることがある。また、特定蔵書のなかでの位置、すなわち分類に類する記号やテキストがみられる。他方で、テキストの読み手による書き込み情報がある。欄外へのノートや強調線、カッコや句読点の付加、他者へのさまざまな指示などである。

最後に、手書き本についての間接情報の研究という重要領域が控えている。どの段階でどのようなテキストが合冊されてきたかは、それ自体、受容の歴史情報そのものであるが、この種の情報は、当該の手書き本だけではなく、外部情報としても入手可能である。もっとも重要なのは、相当数が伝来する蔵書目録である。蔵書目録は、単に、ある時期、ある所有者・機関がどのような書物を所有していたのかを示すだけではなく、それらがどのような関係に置かれていたのか、分類されていたのか（どのような相互関係のテキストと認識されていたのか）についても示唆してくれる。分類秩序は「世界理解の様式」の反映というわけである。さらに、書物の市場が成立した中世末期以後に関しては、書物の流通や価格等の検討を可能とする貴重な情報源でもある。

以上のような研究状況は、古典的なテキスト校訂についても根本的な省察を要求している。究極のテキストなるものが近代以降の神話でしかないのなら、前近代テキストにとって重要なのは、むしろ、各手書き本の「版」としての性格の同定研究である。実際のテキスト刊行についても、古書冊学の成果を網羅した上で、「版」の状態を忠実に復元する資料形式学的テキスト刊行も試みられる。

おわりに

西欧中世におけるテキストとは、先行する多様なテキストを素材とする、無限のブリコラージュであったと考えられる。そこには、オリジナリティや著作権、純粹完全なテキストなどの近代的な観念は介在する余地がない。このような状況を生み出したものは、「織りなされたもの」としてのテキスト行為の多様で能動的な性格であり、そこでは、読みも書きも、そしてその前提になる口頭所作パフォーマンス行為も、同一の原則に支配されていた。そして、そのようなテキスト行為読解研究のもっとも重要な方法論の体系として、モノとかたちの研究があるということの意味をあらためて強調したい。この際、学問研究が、無限に多様な個別の単なる叙述（そのようなものがありうるかどうか疑問であるが）以上のものとなるためにも、比較研究は要の位置をしめる。一般性と個別性の認識についての省察は、まずは他者への寄り添いからしかはじまらないからである。

参考文献抄

アウエルバッハ『中世の言語と読者』、八坂書房

アメス「ヨーロッパ中世におけるテキストの伝播と読書」、『UTCP 研究論集』、第 5 号 (2006)

岡崎敦「写本（ヨーロッパの）」『歴史学事典第 15 巻 コミュニケーション』所収、弘文堂

岡崎敦「リテラシー研究の最前線 一西欧中世史から一」、『西欧中世文書の史料論的研究 平成 20 年度研究成果年次報告書』、九州大学

オング『声の文化と文字の文化』、藤原書店

クルティウス『ヨーロッパ文学とラテン中世』、みすず書房

斎藤晃編『テキストと人文学』、人文書院

清水徹『書物について』、岩波書店

シャルチエ『書物の秩序』、ちくま学芸文庫

シャルチエ／カヴァッロ編『読むことの歴史』、大修館書店

宮下志朗『書物史のために』、晶文社

レイノルズ『古典の継承者たち』、国文社

BRIGGS, C. F., *Historiographical essay: Literacy, reading, and writing in the medieval West*, in *Journal of Medieval History*, 26, 2000, pp.397-420.

CERQUIGLINI, B., *Eloge de la variante. Histoire critique de la philologie*, Paris, 1989.

CHARTIER, R. et MARTIN, H.-J., éd., *Histoire de l'édition française, *Le livre conquérant. Du Moyen Age au milieu du XVIIe siècle*, Paris, 1982.

GEHIN, P., éd., *Lire le manuscrit médiéval*, Paris, 2005.

LEMAITRE, J., *Introduction à la codicologie*, Louvain-la-Neuve, 1989.

NICHOLS, S. G., Introduction: Philology in a Manuscript Culture, in *Speculum*, 65-1 (Special issue: "The New Philology"), 1990, pp.1-10.

STIENNON, J., *Paléographie du Moyen Age*, 2e édition, Paris, 1991.

STOCK, B., *The Implications of Literacy. Written Language and Models of Interpretation in the Eleventh and Twelfth Centuries*, Princeton, 1983.

岡崎報告の質疑

- (三浦) アラビア語の写本の場合、(法学書やコーランが多い) ある解釈が古いものとして残っている。師から弟子に伝わる。先生が授業中に朗読するテキストを聞いて書き写すという形のものがある。講義が終われば、写本に先生が免許皆伝(余所で教えてよい)という記述をする。当該のテキストの何代かにわたる来歴伝承がわかる場合もある。現存するマニュスクリプトには、きれいに書かれたものと走り書きのような汚いものがある。一方、ヨーロッパ中世のものは非常にきちんと書かれている。このようなきれいなものだけ残っているのか。また、ヨーロッパでも来歴などがはっきり分かるようになっているのか。
- (岡崎) 12世紀以前のは、材料が限られており、教会・修道院の狭い世界で製作され、伝来したきれいなものだけが残っている傾向がある。13世紀以後については、量が爆発的に増加するとともに、質も多様化する。著作系のモノ研究については、個人的な印象では、従来比較的きれいなものを特権視する傾向があったのではないかと思う。アーカイブ系の資料については、コピー、要約、抜粋、断片など、非常に多様なものが、膨大な量残っている。
- (三浦) 権威付けがヨーロッパの場合、形式におかれている。アラブの場合は個人のノートだが、先生がサインをするという形式で権威づけをおこなう。
- (岡崎) たしかに、ヨーロッパの方が形式主義では。大事なものは、一般に「かたち」もきれいである。西欧の古書冊学(日本の書誌学に該当する書冊の物理的研究)も、モノを対象とするかたちの研究であって、テキスト内容やその重要性、信頼性という観点で研究されているのではない。
- (三浦) テキストの伝来系譜は、マニュスクリプトに書かれているのか?
- (岡崎) テキストをコピーする際、その都度典拠を明らかにする慣行はないと思う。逆に、各手書き資料の筆写関係の復元研究こそが、近代文献学のもっとも重要な貢献とみなされている。
- (三浦) イスラムでは師弟関係、パーソナルな関係が重要なため、断片化しない。
- (藤實) 源氏物語をある公家の家で持つ場合、なぜその公家の家で所持されているのかについての伝承が必要なものと、伝承が不要なものがある。モノによって伝承のレベルは違うのではないか。ヨーロッパの場合、宗教に関わる秘伝的なものと、聖人の言葉集のような抜書き的なものと、素材によって峻別する必要があるのではないか。伝承関係に付される重要性の認識レベルは、テキストの類型によって異なるのではないか。
- (岡崎) 西欧では、たしかに、どの写本から継承したということより、たとえば聖書や著名な教父のテキストであるということが大事なのではないかと思う。
- (入口) 日本の場合、伝承による重要な写本、切り紙伝授などの断片も両方ある。一部だけを伝授していく(モノとしての伝承)が、両者が並存している。
- (岡崎) 伝承という場合、モノとテキストという二つを区分する必要もあるだろうか。ヨーロッパでは、テキスト自体が根源的に持っている権威が、転写のやり方や冊子の形態までも決定する。他方、あるテキストがどのような過程をへて伝承されるかについての同時代的関心は薄い。

- （三浦） イスラムの場合、著者が重要で、さらに写した人は、テキストの伝承者であり、理解したうえで伝承をする。
- （岡崎） 写した人の意識はどのようなものだったのか。
- （三浦） 著書の中身を理解し、他に伝えたいというところにある。他方、書籍商のもとで、アルバイトとして写本づくりをする場合もあったが。
- （岡崎） 目の前のモデルをそっくりそのまま写すのか。それともそこに理解への努力と解釈が介在するのか。
- （入口） 日本の場合、一字一句忠実に写すことが大事。私見は入らない。奥書に一言一句違わずに写したというように書く。
読者が新しいテキストの創造者になる場合もある。参加型読書、著者が偽名でもかまわない。テキストの積み重ね、作者不在でかまわない。
- （藤實） 寺社縁起や物語に読者が好きなエピソードを加えたり、自分の家に関する内容を自由に入れることもある。パロディ(前提となるものの存在)の妙を愉しむことが多い。
- （岡崎） 時期的な問題もある。ヨーロッパでも、それまでの解釈行為としての筆写にかわって、16世紀以後、一字一句写すように変化したといわれる。近代的なテキスト概念が固まると、「パロディ」などの新しい発想が生まれてくる。それまでは、どんなに書き換えたり、続編を書いても、「同じ」作品という意識が継続する。
- （入口） 平安末(藤原定家から)、一字一句たがわず写本を作る時代になる。この伝統が江戸末まで続く。
- （岡崎） 西欧では、歴史的にいつも「起源に帰れ」が叫ばれる。「原初」の純粹さが、時期を追うごとに損なわれるという意識があるためだが、実際に「起源に帰った」ことは一度もなく、常にまったく新しい創造がなされた。「正しい原本」という意識の存在と、実際の筆写行為における「忠実性」とは、必ずしも同じではないことに注意すべきだろう。
- （渡辺） 今日の報告では冊子体の史料に対するモノとしての分析であったが、一枚物の文書についても同様の手法で研究が行われていると考えてよいのか。
- （岡崎） モノとしての関心というものが深まった。レイアウトをものさしで測ったり、他の方向性からのアプローチも増えている。